

昭和三十一年十一月

石城山神籠石才一次調査概要

禁無断転載

文化財保護委員会

目次

一、はしがき	1
二、立地及び遺構の概要	2
三、北谷間の石垣壁と水門	7
四、東谷間の石垣壁と水門	10
五、オ一門跡（菅石地区）	13
六、列石	15
七、土壘	21
八、地層及び岩石	25

九 総括

付 調査参加者名

一 はしがき

石城山神籠石は、山口県熊毛郡大和村に存し、昭和十年に史跡に指定された。しかし、列石の走向線の全体も不明のままであった。ところが近年種々の現状変更の問題も生じているので、その規模、性格を明らかにし、積極的左保存対策を講ずる必要にせまられ、文化財保護委員会は、山口県教育委員会、大和村教育委員会と共同して、昭和三十八年度から二年計画で発掘調査を実施することになった。

調査は、昭和三十八年十一月六日（水）から、二十六日（火）までの二十一日間実施し、二十七、八両日は埋め戻し等の作業を行なった。

なお、本調査には、土地所有者はじめ、地元関係者の方々の絶大な協力を添くしたことに對し、厚く感謝の意を表したい。

（斎藤 忠）

二、立地及び遺構の概要——オ一回——

ノ、石城山山頂付近の地形概観

岡南丘陵地域の南部に位置する石城山は、花崗岩類を基調とする標高三五九七メートルの晩壯年期的山丘で、山麓一帯の低い老年期的丘陵地域に秀立状に聳立している。山頂付近には高日ヶ丘（三五九七メートル）、鶴ヶ丘（三五七六）、大峰（三五六二）、飯塚^{いはら}五十^{びら}嶺^{だけ}岳（三五二六）、月ヶ丘（三五〇五）、星ヶ丘（三四〇六）の六峰が群立していて三五〇メートル内外の高度に山の定高性があり、古い準平原遺跡を思わせる地貌を呈している。

また、急な谷壁をもつ多くの谷は地層構造と関係があるらしく、山頂の大峰及び奇兵隊教練所付近に谷頭が集まり、列石付近から下方の山腹では放射状に山体を剖析している。こりような殊立状の山塊と群峰状の山頂地形は、地質の変成作用に基因する堅岩化と岩脈の走向に由まするものと考えられる。

全山針葉樹と広葉樹や竹林の混合林で蔽われた温帯林の林相を呈し、剖析谷は

拓かれて階段畑や水田になり山麓に及んでいる。

2. 列石内域の神社及び遺物散布地と宅含層の分布

現在の神社と民家はその大部分が南斜面に分布し、大峰の山嶺に一部の神祠があるほかは、背後と両側が尾根で囲まれた、北風を避ける場所を占地している。

地表探査によって検出した遺物散布地と宅含地は、高日ヶ岳山頂付近、五十いたける釜

神社、物部神社、若宮神社、石城神社と大和神社の境内やその近傍に存在し、遺

物はいずれも時代の降った土師器の祭祀土器に限られ、築城当時のものばかり

ん、その後の生活址を物語る遺物や遺構を見出すことができなかった。登りて往

時の居住地区を想定するとすれば、物部との位置関係や地形の上から、谷頭が集

まり、大峰や星ヶ岳、鴨ヶ岳と高日ヶ岳に囲まれた奇兵隊教練跡の平坦地から

石城神社をへて、神護寺にいたる通称門ノ付一帯の地域を当てることができそう

である。

3. 配置と立地

現在地上に遺存する遺構は、延々と連なる土塁（列石）をはじめ、水竹付近の石垣壁、空壕と沓石をもつ門地らしいところや水竹址である。

土塁（列石）と水竹が山頂の諸峰と谷頭を取り込み、地形の起伏に従って不整の卵円形に連なっている。その長軸は北面から東南方向で長さが約七九五メートル、中央部の短軸は約三三五メートルである。列石の高度は西部が最も高く、最高約三四二メートル、低いところでは約二六八メートルを測り、その比高差は七四メートルであるが、大体三一〇メートル内外の高度に連っている。

列石は二五メートル地点から三五メートル地点の間を欠いているが、土塁の痕跡を示す版築構造の溝状堆積物が認められる。また、二七〇メートル地点付近には露岩が防壁に利用されていたため列石や土塁を欠いている。

水竹は谷底に築かれ、現在、東西南北の四水竹が地上に遺っているが、谷が東に開いた東坊あず東南方の水田下にも埋没している疑いがある。

沓石が存し、門址と推察されるところは、現在、北斜面中央部の谷頭付近に、

泝だけみつかっている。

水付に直接関係のない石垣壁が、東水付の両側のような土塁の築造の困難な急斜面に築かれているが、これらはその延長は短かい。

排水口とそれを覆うた石垣壁を含めて水付と呼ばれているが、排水口の水付と区別し、断続する上記の石垣壁と合せて石垣もしくは石垣壁と呼ぶ方が妥当であろう。石垣壁と土塁の接合部は四八メートル地点付近にみられ、両者の関係を明らかたにすることができた。

また、空濠は、高日ヶ岳の東の尾根が急に緩斜れた通称人村の地に設けられている。その形態は断面がV字形で、上の幅約一メートル深さ五く六メートルを測り、東端がつまり西が開いている。なお、この底から何等の文化遺物も検出することができなかつた。このような空濠は、このほかに、地形の上から鱒ヶ岳西南方の尾根や、南水付の東部の平坦面などにも遺存している疑いがある。

列石の多くは山の基盤面に築かれているが、場所によっては掘き固めた土の上

に構築されたり、四ノメートル地底のごとく、花崗岩の軟岩を掘り削って列石を置き、その上に土塁を築いたところもある。

(小野 忠 源)

三、北谷間の石垣壁と水け — 才二回 —

石坂山の北方の谷間は、鷲ヶ岳、星ヶ岳、高日ヶ岳からの流れ合わさった、かなり大きい谷間を構成しているが、この部に東側と西側とにはほぼ直角をなして二つの石垣壁が連なっている。石垣壁の中核をなすものは、東側のもので長さ二一、三メートル、高さ（最高部）四メートル、石積の奥行は一、六メートルを算する。石垣は谷間の最も凹所に沿った箇所と考えられる場所に、傾斜に従って設けられ、東谷間の石垣壁に見られるように特に岩盤を削ったような場所はない。前側の方が高くなるに従って逐次背後に石の破片を填めて所定の高さまで構築した。背後の積石面と部には扇形形の断面を呈する盛土を施してあるが、その前側、即ち北側は特に粘土をもつて入念につき固めている。盛土の背後（南側）は一段低い部分を持っていたことになるが、その後の雨水等で間もなく土砂の堆積によって埋められたと推定される。

水けはほぼその中央下底部に設けられ、全長一六メートル、高約八〇センチ、幅

約五〇センチ 入口より一三、七メートルまでゆるやかな傾斜を持つが、それ以後は急勾配をなし、取入口に至る。底は平らな石を敷きつめ、西側壁は概ね大小二寸の石を二枚積みとし、天井は巨大な石二一何を横架している。水の取入口は特別の構造を持たず、最奥部天井石の南側に比較的小形の石数何を充填し、その間隙は小形の礫を以って塞いでいる。

入口の部分は他の石積部分と異って、長手の石を縦に使用し、上部に大形の石を載せてある。

現在の水門の石垣は約六四メートル西の方に隔っているが、今小流が流れているこの部分は本来は接続していたものと推定される。西側石垣の東端の小流に接する部位は自然の岩盤を一部利用しているため、水の侵蝕に対して一番弱かったためであろう。水門西側石垣壁は谷が至って来たためか、特に排水溝の施設がない。長さ二一、三メートル、高さ(最高部)四、四メートルを算する。

石垣壁の用材は、花崗閃緑岩・花崗斑岩・片麻岩で閃緑岩と斑岩の比率は三対一

の割合で、片麻岩は極く少い。

(赤 藤

志

・ 亀井

正道

・

平

野

和

男)

~p~

四、東谷間の石垣壁と水門——オ三四——

東谷間は高目ヶ丘山頂から南東にのびた舌状の丘陵にほぼ直角に切込んでいる。

谷の規模は余り大きくなく、谷巾も狭い。水門は谷奥に位置し、水門石垣上の標高は三一四メートル余である。水門から谷を降りると傾斜は比較的急に岩盤が所々に露出している。水門は長さ全長約六〇メートル、高さ約五メートルで水路は谷底よりやや南に寄った岩盤上にある。

水門上平坦面に長さ一六メートル、巾二メートルと、それにはほぼ直角に長さ九メートル、巾二メートルの二本のトレンチを設定した。表土約一〇センチを除くヒバラス石となり、土師履の土番や敷点の布目瓦が出土した。石垣下部は比較的大きな石を用い、上方は扁平な切石を横積みになっている。石垣上端や一部で石材が転落しているが全体に良く整っている。

水路を構築するため背後の谷壁を相当大規模に加工したと考えられる。構築当時、谷には所々に岩盤が露出していたと考えられる。その岩盤をU字状に削り、水

路上方も整えて一定の傾斜をたせてある。水路下側はすべて岩盤で、一部は岩盤を山状に切込んでゐる。

水路全長一〇六メートル余、巾約五〇センチ、高さ六〇〜九〇センチを数える。水路は谷底に沿って傾斜しているが、岩盤を切込んだ部分の傾斜は頗く、水路最奥部はほぼ平坦に整えてある。

水路最奥部は岩盤を山状に切り、奥壁よりやや間を置いて菱形の石を水路にはめ、西側にや、間隙をもたせ、岩盤との空間にはバラスを充填している。水路上方の岩盤を流れる水は、バラス部に流入し、菱形の石の両側から水路に流入するようになってゐる。

水路天井は一五枚の切石で構成され、石垣上端面までバラスが充填されていると考えられる。

この水竹に利用された石材は主に細粒花崗斑岩と英斑岩で谷壁および北方斜面に露出し、水竹から北方につづく石列の背後には岩盤が露出し、石切場として利用さ

れたと考えられる。

(朝見 浩・藤田 等)

五、オ一竹跡（番石地区）——オ四四——

従来番石と呼ばれていた巨石の所在する地域は、北谷岡石垣壁の東方列石線に沿うて約二〇メートルの所にある。この部分は列石がほぼ四メートルの間隔を置いて存在せず、また前衝は全くとした谷間を有して眺望もよく、或いは竹跡でないかと予察されたものであった。調査の結果次のことがわかった。

一、従来番石と呼ばれていた巨石は、上方と下方に各一何づつ存していたが、これは柱礎の一種であり、下方のものはほぼ当初の位置と考えてよいが、上方のものは原位置から移動されたものと考えられる。

二、原位置と認められる礎石の西方に当り、ニヶ所に根石の存在が認められたが、このうち、西端のものは上方に存する礎石の根石と考えられる。

三、したがって、この地区は竹跡と考ええてよく、柱間は一箇で、間隔は約七メートルと推察される。なお、中間に存在する根石は竹藪の中央に当る首石の如きものが存したのではなからうか。

4. 列石の前面約四メートルの位置に、東西約一五メートルの石積みが発見された。
5. この石積みは中央付近では五段あるが、両端に行くに従い、段数が少くなり、
端では各一段となる。

6. 石積みは中央付近では約三段まで露出していたと考えられ、それ以下は赤色土
で固められていた。

7. 出土品には土師器片、須恵器片が若干見られるが、これらの中には、根石の周
に混在していたものもある。

8. かりに列石が当初埋設されていたとしても、この門跡では列石の上に、さうに
一枚の石を立てていたとも考えられる。

(幸 藤 忠・三宅 敏 文・岩崎 卓 也)

六、列石

この急峻な山陵の可成り上部を鉢巻状にとりまいてゐる列石が、山の傾斜とどのよ
うな関係をもつて併列されているか、かつその列石がどんな形状に加工されたものを
用いているかといふことが、この遺跡の性格を解明するよりどころとなるものと思へ、
今次の調査における重要な目的の一つであつた。かつ佐賀県下における今夏の同種遺
跡の調査から、列石を楸がためとする築堤の存在の発見から列石の究明とともに築堤
等の所在の有無を究めるために列石の要所において、たゞにトレンチを加えることも
かかせぬ目的の一つと考えた。過去においてこの列石の露出を行つた痕跡が溝状にの
こつておつて、列石の併列のありかたの一応の目じるしとなる便宜があつた。従つて
列石は北水門から番石、番石から東におつて北水門東側に表われる始めての列石を基
点として（爾後基点といふ）二ハメートル附近まで、基点から三ニ六メートル—三四メートルの
間及び四三メートルのところから東水門までの間とについて行い、北水門から東水門間の
大凡そ九割近い列石を露出調査し、尚加えるにたゞのトレンチを四条試みた調査から

する大要を記して見よう。

列石は凡て当山塊に自然露頭する花崗閃緑岩外三種の岩石を加工したものを用いて
いる。大いさは高さそれぞれ七〇—ハッセンチ前後で、長さは二五〇センチに及ぶ大形のも
のから、わずかに三〇センチ程度の小形のものがあり、その厚さ多く一五—二〇センチのもの
であるが五〇センチに及ぶものも少なくない。これらの列石は前面、西側縁及び上縁の尺で
が加工せられておる。西側縁は所隣の石との組合わせを容易にし、かつ鞏固にする用
意が施されており、前面は平にととのえられていること勿論であるが、上縁の加工に
若干の相違がある。即ち駆石において上縁が平坦を呈するか、傾斜するかその傾斜も
二段傾斜をともつものなどがあり、もつとも、後者の二段傾斜のものとともに注意を引
くものに、前面下底に若干の張出しをのこすものがごくまれに見られたが、これらは
この神籠石の祖形の形を伝えるものと思われ、本遺跡の性格と年代についてのよりと
ころを与えるものと見られるふしとなつた。

かかる加工された各個の石が傾斜ある山肌の内面に向つて七〇—八〇度程度の傾

斜をもつて、平つぎでありながら底部に根がたの石をしく僅少の例の外は殆んどそれすらなくて鞏固に立てならべられているのである。しかもこれらの列石が山肌の斜面を鍊手状に切りとつて、一見外部にあらわす如くに立てならべていることを一般とするが、とくに北水内東方尾根の張出し部分では、列石が張出しの尾根の方向に廻らずして、この尾根を切り削いで列石をならべ立てている場合もみとめられた。しかもこの尾根が内部に石英質を多く含む崩壊直前の軟質の岩盤よりなつていたため、この部分にV字状形の溝をほり列石の列の方向を必ずしも尾根の張出しに關係なく、所定の方向に彙配した点のあつたことは、列石の露呈を必要としなかつたことを思わせるきわめて重要な点であつた。又ある地域では自然の露頭岩盤の斜面を鍊手状に平たく切りとつて四^ノ近しい段をつくり、ここに列石をおいた例も見られた。この場合は列石前面により廣い段をのこしていた。又自然傾斜の強いところがかつ自然岩盤の露頭を見るどころでは、この岩盤の露頭面に若干の手を加えて、斜面づくり、列石の一部に組入れた、露頭岩盤が列石の代役をつとめている場合も見られた。更にこの露頭岩盤

の加工の上、小石の割石乃至は切石を加え補っているところも見られたが、とくに東木門の北と南の両側では自然丘の傾斜が緩いため、自然岩盤の露頭を基底にして数段乃至は十数段に切石を石垣状につんで石壁の構造をなしたところもあった。

これらの列石の石質の相違は四種にのびり前述の如くいずれも当山塊に露頭を見るものであることはその筋の専門的調査によつて補付けられたことであるが、それら露頭岩盤所在の石質の相違と深い関係をもつて配された列石のうちでもとくに首石西方6ヶ目から8ヶ目までの列石は一つおきに二種の異つた石質の石材を交互に使用するという用意がうかがわれた。

これらの列石の各所において列石上縁に接し、二層三層乃至は数層に、褐色粘土、砂礫混じりの褐色粘土、青色粘土或は暗・淡褐色粘土等の層序が明瞭にみとめられたことであつた。これは次に調査された縦のトレンチの結果から、築堤の遺存であることと明らかになり、それはこの列石の全域において、顕著であると否とにかかわらず

認められたことであつた。

それではこの列石列を縦に割ったトレンチの調査結果の所見についておれよう。既に北水内東側尾根の母胎であつた岩盤をU字形に切り崩して列石をおいたところで、列石の前後の両面を築土の層序で覆いかためられていたことを明らかに認めることができたが、No.2の縦のトレンチでは、列石前面わずか六〇厘許りしかのこしていないため、それが本来の形か否か早急にきめがたいとはいへ、No.1のトレンチの所見同様列石の前後に築土の層序が明瞭にみとめられたところから、列石は少くとも六〇厘以上前面に覆土をもち、かくされていたことを確認させた。しかもその列石前面を覆う築土の層序はほぼ列石の傾斜に並い七〇—八〇度の傾斜をもち、列石上縁より三米余の高さまで築土がなされていたことを考えさせた。これは更にNo.1の縦のトレンチの所見では前面の覆土を推しうる遺存形はなかつたが、列石基底より更に三〇厘深くから築土を行い列石を立て、その背後を山丘の内ふところとの間に、高さは本トレンチとNo.3のトレンチとで見られたところでは少くとも列石上縁より三米以上を考えさせる。築土の層序が数十層に重ねつまれており、又No.4トレンチの内部に表われ列石より計

つて、六メートルの内側に及んで三メートルばかりの深さの溝状の切りこみをつくっているこ
とから、列石前面の積土を約二メートルのトレンチの仮りに六メートルを加える、六メートル最底の築提
の幅が考えられ、この幅トレンチにおける築提の上頂部は、厚さを明らかにしがたい
列石脊後の築土を除いても、四、六メートルの幅をもつていたことがさっせられる。したが
つて列石は少くとも前面に六センチ以上築土で覆いかくされていったことになり、この列
石は築提の基礎がための役を果したものと外部に表われていないものとでないことを明らか
かにした。しかもこの脊後の溝中、表土から三、五センチ深く系切底の上層層を発見したこ
とは、この遺跡の年代を考慮するひとつの手がかりになるものである。

七 土 壘

土壘の発見は十一月一七日である。この日は特に列石の立地と構築方法について調査した。その際、列石が露出していた四四〇メートル地点から四八三メートル地点の間に列石の上面に乗った着しく硬い筒状礫積層を吟味し、その下部から木炭屑を検出した。これらに着目して数箇所の小試堀を試み、堆積層の層相と層の傾斜を諦り具合を調べてこれが人工による構築物であることを知り、列石が本末土壘構造の一部をなし、その構造上とも土壘の底に埋設してあったのではないかという感を強く抱くに至った。そこで二二日から列石の延長方向に直交する四箇のトレンチを設けて発掘し、その結果、土壘や空壕の存在を確認するとともに、列石の機能を明らかにすることができるとがとされる。

土壘の形態・規模及び構造、石城山山域跡の囲郭はその大部分が土壘からなり、その形態は前後とも 60° 、 70° の傾斜をもつ壘状形態を基本形とするが、大部分は地形に

支配せられて假状を呈している。その高さは高いところで三メートル数十センチ、上幅はおよそ八・六五メートル内外である。

列石は土塁内部の下端部に設けられた土留石で、土塁の崩壊を防ぐ機能を有し、築城当時は土塁の末端に近い箇所に埋置するように構築されていたものである。現在露出しているのは、侵蝕を受け崩落して流失したり、明治年間に土塁の下端部を毀つて列石を掘り出したためであることがわかつた。

断面にみる土塁の内部構造は、列石を土留石とする版築構造で、心部の大部分は基盤表かりなっている。この山城の土塁はおそらく次のような工程を経て造られたものと考えられる。すなわちまず山腹の斜面の残積土を除去して岩盤を出し、短距離の高い部分は岩盤を掘り産め（四〇メートル地点）、低いところは土を搗き固めて土留石の列石を組み、その外側に列石の傾斜（六〇度〜七〇度）とほぼ平行する板枠を設けて、版築工法で一層ずつ土を搗き固めながら土塁の形態を整えたのである。なお土塁の土砂の大部分は、近辺の残積土を用いている。

土塁は傾斜の緩かな斜面の尾根に遺りやすく、谷壘の倉庫場所では侵蝕されて列石が露出したり、茂い甬行土に覆われている。意味ある事実は、場所によつて版築の叩き固めに硬軟の差が著しいことである。すなわち三ニメートル地点付近から東水門の石垣壁に至る間が頗る硬く締つているのに対し、それ以西は西漸するにつれて軟かく侵蝕に弱い構造である。また列石の加工の程度や組み方は、門地（沓石）以西が粗雑なのにくらべそれ以西が精緻でかなりの場所差が認められる。このように同じ版築工法や土留石（列石）でも場所差があつて、これらが地形の傾斜と相まって土塁の遺存度に深い関係があることを示している。

なお列石は一般に面取石を用い、その土縁が一直線になるように配列され、しかも極く少数ではあるが、特殊な加工を施した石が混つていて一見土中に埋設するようなものとは考えられない体のものではあるが、これらはおそらく、山城築成の起源地域の技術的伝統の残滓を示すものとみてよいのではないかと推考される。

なお、試掘の箇所が列石の前面で柱穴列のあることが知られたが、これは防禦用の木柵分岐築工事の除、土塁の前面の土留め用の板垣い納なもの、柱かは、次年度の調査の結果にまつことにした。

（小野忠憲）

八、地質及び岩石

I 地質の概要

石城山の山体の頂上部付近を構成する岩石は次の如くである。

1. 花崗閃緑岩

2. 片麻岩類（珪質縞状片麻岩、黒雲母縞状片麻岩）

3. 細粒花崗斑岩

4. 石英斑岩

これらのうち山体の大部分を構成するものは細粒花崗斑岩および石英斑岩であつて、花崗閃緑岩および片麻岩類は山頂の西方、杓石の沢、その他露出面で十数メートル程度にすぎない。

※ 右記の岩石名は野外の肉眼鑑定によるもので、正確な岩石名は顕微鏡下の鑑定によらなければならぬ。

II 岩 石

1. 花崗閃緑岩 岩石学的には領家花崗岩類に属するものである。分布…北水内
の沃に沿って星ヶ岳、仁王門へと幅百数十m程度で南北に細長くのびるものが最も
広い分布であつて、各所に露頭や大きい転石が見られる。その他南の水内付近
石城神社付近にも小分布を示す。また各所に幅十数メートル、数十メートル程度の岩塊が、
細粒花崗斑岩の捕獲岩として認められる。岩質…粗粒、優黒質で片麻状構造がよ
く発達する。露出面で見られる限り節理の発達はあまり著しくない。

2. 片麻岩類 領家変成岩に属する。珪質縞状片麻岩、黒雲母縞状片麻岩よりなる。
分布…南部仁王門から新しく切削いた道路に沿って多く分布が見られる。東の水

内西部、石城島神社付近にも小さい分布がある。岩質…黒雲母片麻岩はほとんどが風化していて、新鮮な石垣へ水門などに使用されているものはすべて珪質絹状片麻岩である。

3. 細粒花崗斑岩、石英斑岩 両者は肉眼的に石英の斑晶の有無によって区別したが、本来同じ岩体の岩相の相違によるものである。分布…山体の大部分がこれらの岩石よりなるが、中でも細粒花崗斑岩が大部分で石英斑岩は局部的である。岩質…細粒、新鮮なものは淡青灰色であるが、風化するとやや褐色を帯びた灰白色になっている。カリ長石の斑晶の目立つ部分もある。所によって程度は異なるが、ほぼ互に垂直方向に交わる節理がよく発達する。この節理の発達が、自然のままの状態で列石や水門の石垣に用いる程度の岩塊を産する。最も大きな要因となっており、ほとんど人工を加えることなくそのまま利用できる。場所によっては南北方向の流理構造が見られる所がある。

III

水門石垣の岩石

1. 北水門

北水門——西水門、沓石の東方、東水門付近など各所に崖をなすような露頭があつて崖堆が發達する。沓石の沢や、東水門の沢などで見られる細粒花崗斑岩の巨大な岩塊群は、上部の崖の崩壊によつて沢を埋めたもので、沓石の沢では列石に用いられる程度の大きい岩塊が下方の塩田川付近までも認められる。これによつても列石、水門の石の供給源をうかがうことができる。

水門の石垣を構成する岩の種類には花崗肉緑岩、細粒花崗斑岩、石英斑岩および珪質縞状片麻岩がある。これらの岩石のうち花崗肉緑岩が最も多く細粒花崗斑岩がこれにつぎ珪質縞状片麻岩と石英斑岩は極めて少い。この割合はほぼ花崗肉緑岩七〇%、細粒花崗斑岩二〇%、その他一〇%である。しかし正確には全部の石をかぞえたわけではなく、また細粒花崗斑岩と石英斑岩の区別は肉眼的に困難

な場合があるので概数である。

2. 東水門

東水門の岩石の種類も北水門と同様に花崗閃緑岩、細粒花崗斑岩、石英斑岩および珪質縞状片麻岩である。ここでは石英斑岩と細粒花崗斑岩が多く、この両者の割合はほぼ等しく両者を合わせると九〇%以上に達する。

3. 南水門

南水門は充分露出していないが、細粒花崗斑岩が最も多く、珪質縞状片麻岩がこれにつき、花崗閃緑岩が最も少い。

4. 西水門

西水門では細粒花崗斑岩が大部分をしめ、花崗閃緑岩が多少混じっている。西水門についても今回は発掘が行われていないので充分な観察を行うことができない。

5. 北水門と東水門の岩石の相違

以上述べたことより各水門の岩石の種類割合は異なるが、これはその付近の岩石の分布と密接な関係がある。従って水門に最も近い所の岩石を使用したものと思われる。しかし東水門においてはこの付近に花崗肉緑岩の露頭が見られないので、これは石英斑岩や細粒花崗斑岩を供給した場所よりも遠い所から運搬して来たものか、たまたまその付近に転石として存在したものを利用したかは不明である。

東水門の岩石の形状については、石英斑岩や細粒花崗斑岩はその付近に節理の発達極めて著しく、新鮮な露頭も多く見られることより考え、節理にそって基盤岩の崩壊したものや、人工的に取り出したものを殆ど加工しないで使用しているものと思われる。北水門の場合にも細粒花崗斑岩は節理に沿って崩壊したものを使用しているようであるが、この付近は節理の発達が不良なため形が多角形になっているものが多いと考えられる。花崗肉緑岩の場合には最も平坦な面は岩石

の節理面と考えられ、軟石をそのまま利用したものが相当あるようであるが、人工的に形をととのえたと思われるものもある。

IV 列石の岩石

列石を構成する岩石は花崗肉緑岩、細粒花崗斑岩および石英斑岩である。今回調査したうちには珪質膏状片麻岩は見あたらなかった。列石の岩石の種類も基盤の地質と密接な関係がある。調査したうちの数箇所例を示す。

1. 北水門近くの列石

測量基点より六〇メートルの点より一〇〇メートルに到る四〇メートル間において六〇個の列石のうち花崗肉緑岩三九個、細粒花崗斑岩一八個、石英斑岩三個であった。また一三〇メートル付近より一四〇メートル付近には花崗肉緑岩と細粒花崗斑岩が交互に配置されている。

2. 首石付近の列石

沓石より北水門側では花崗肉緑岩の割合は少く細粒花崗斑岩と石英斑岩の割合が多い。花崗肉緑岩の細粒花崗斑岩および石英斑岩に対する割合は沓石より四〇メートルを取れば約五・一位である。沓石の東側では測量基突より二〇メートルの所より二四メートルに到る向の四四個については石英斑岩と花崗斑岩が各々一個のみで他は何れも細粒花崗斑岩である。

3 東水門付近の列石

測量基突より四六メートルの突より東水門への二九個については石英斑岩二五個、細粒花崗斑岩四個である。

以上のように列石の岩種は北水門付近が花崗肉緑岩が多く、東水門に向って急速にその割合が少くなる。また東水門付近で圧倒的に石英斑岩が多いが、これはこの付近に石英斑岩の露頭があるためである。列石では一般にその前面は自然の節理面が多く、上面や側面はかなり人工が加わっているようである。

要 約

1. 列石と水門の石垣の岩石種には、肉眼約に花崗閃緑岩、粗粒花崗斑岩、石英斑岩および片麻岩がある。

2. 使用された岩石はその付近を構成する地質と極めて関連が深く、従って遠くから運搬されたものではなく、最も供給し易い場所のものが利用されたものである。

3. 個々の岩石について詳しい検討は行なわなかったが、少くとも主要な平滑面は自然の節理などによる面が最も多く利用されている。

(河野通弘、岡村義彦)

九 總 括

石城山の神籬石は、明治四十二年に初め、山と泉熊毛郡視学であった西原巖吉先生によつてみとめられ、学界に紹介された。明治三十一年に、福島^岡泉高^夜島の神籬石がはじめて「東京人類学会雜誌」に紹介され、之の後、八木英三郎氏、喜田貞吉博士を中心として、山城説と靈域説との論争が展開されたが、石城山の神籬石は、あたかもこの頃、かねて知られていた福岡泉女山神籬石所在地の出身者である西原氏によつて見出されたのであつた。

確認後、石城山神籬石は、村当局によつて、列石をあらわすため、かなり大規模な発掘が行なわれつつあつたが、昭和十年には史跡に指定されて保存されることになつた。

今次の調査は、列石の走向線を明らかにしてこの性格を明らかにするとともに、建築的な遺構の有無や、遠近末山姥の穴と伝承されてゐる水門の箇所を究明することに主眼をおき、この地域は、北方から東方の水門の間の約五キロメートルの範囲に限ること

にした、また、岩石等を鑑定して石材の採取の場所をも明かにしたいと考え、この方面の学者の協力をもちめることにした、とくに北方及び東方の谷間に存する水門の石垣壁は荊棘や雜草におおわれこんだので、これらを伐採整掃し、石垣壁面の全貌をあらわし、従来全く不明のままにされていた石垣そのものの構築を明かにし、水門の取入口の位置をたしかめ、また、列石線においては、かなり深く埋没している箇所も多かつたが、これを徹底的に究明し、ところどころ土層を縦断したトレンチをつかって列石と土層との関係をきわめ、列石の一つ一つについてはすべて四十分の一で実測をなした。

これらの調査によって明らかにされた重要な諸点を列記すると次の通りである。

○ 北谷間の石垣壁は、東側と西側との二面にまたがり左右の二翼をもつ雄大なものである、東側のものは、この中核をなすもので、長さ二一、二メートル、高さ約四・一メートル（最高部）で、石積みの真行は、一一、六メートルある。

内部は石の碎片をうづめて構築し、この上部に盛土をほどこしている、また水門

は全長一六メートル高さ約八〇センチ幅約五〇センチである。西側の石壁は長さ二一・三メートル高さ四、四メートル（最高部）である。石材は主として花崗内縁岩及び花崗班岩を用い、少数の花麻岩が含まれる。ちなみにいう、発見当時、喜田博士は、この水門の深さを百六十尋以上と報告した。これは子供が縄をもつてはいつたときの測定の誤りである。

東谷間の石垣壁は、長さ約六〇メートル、高さ約五メートルで、一部分、自然の岩壁をこのまま利用し、この上面に石垣を積んでいる。石材は細粒花崗岩と石英班岩とを用い、石厚の関係で、北谷間の構築よりも整っている観がある。水門は長さ一〇、六メートル幅約五〇センチ、高さ約六〇センチ、乃至九〇センチで、岩盤をくりこんだ部分もある。

○ 沓石といわれる二つの加工石材の横たわっている箇所は、やはり付跡と考えるとよい。一つの石材は現在置であり、他の一つは移動されたものである。柱間は一間^はで、間隔は約七メートル。中間に根石がある。この前面に、東西約一五メートル

の長さにわたって石積みがあり、門跡の地床面及び粟石群の間から土師器破片が
発見された。

○ 列石の石材は石英斑岩、花崗内緑岩で、石英斑岩は、自然剝離性をそのまま利
用し、厚さも異外うすい。内線岩のものは厚さもあつて、横に長い。これらは傾
斜する山肌にならべ互いにたたく接続させるために技術的にこまかい加工をなし
ているが、表面はセツ度前綾、前面に傾斜度をもたせ、上縁はヤツ外の方に傾い
ていることが通有である。

列石と後方の山土及び前面の山土との関係を明らかにするために、三ヶ所ほど
土層を列石線とたてにトレンチをうがって精査したが、この結果、列石の上
面をおうた縞状の推積層は人工によつた一種の土塁であり、列石は土塁内部の下
部に設けられた土留め石であり、本来土塁の裾に近い箇所に埋置されたものご
ちることが知られた。なお、急傾斜地の箇所に空堀りの箇所のあることも明らか
にされた。

○ 石城山の山体の頂上即付近は 花崗閃緑岩 片麻岩類 細紋花崗斑岩 石英斑岩によつて構成されており、列石や谷間の石壁の枝料の供給源は、この近くの山頂からであつたことが知られる。

神籠石が 古代山城跡であることは明かである。今後の新しい課題は、遺構のニまかい分析である。そして 年代観の確立でありあわせて すべての神籠石を通じての分析や社会的背景や築造の技術や、神籠石を通じての対外関係の究明であらうと思ふ。(青藤 忠)

付

調査参加者名 (順不同)

文化財保護委員会(発掘施行責任者)

同

同

青藤 忠

三宅 敏三

田村 晃一

東京教育大學

同

云島大學

同

山口大學

同

同

東京國立博物館

同

山口國立博物館

山口國立医科大学

水産庁水産講習所

磐田市郷土博物館

八幡一郎

岩崎卓也

松崎寿和

潮見浩

川野池

河野通

岡村義彦

三木文雄

亀井正道

佐伯敬紀

藤田一等

国分直一

平野和男

大和村教育委員会

文化財保護委員会（資金前渡官吏）

同

（同

）

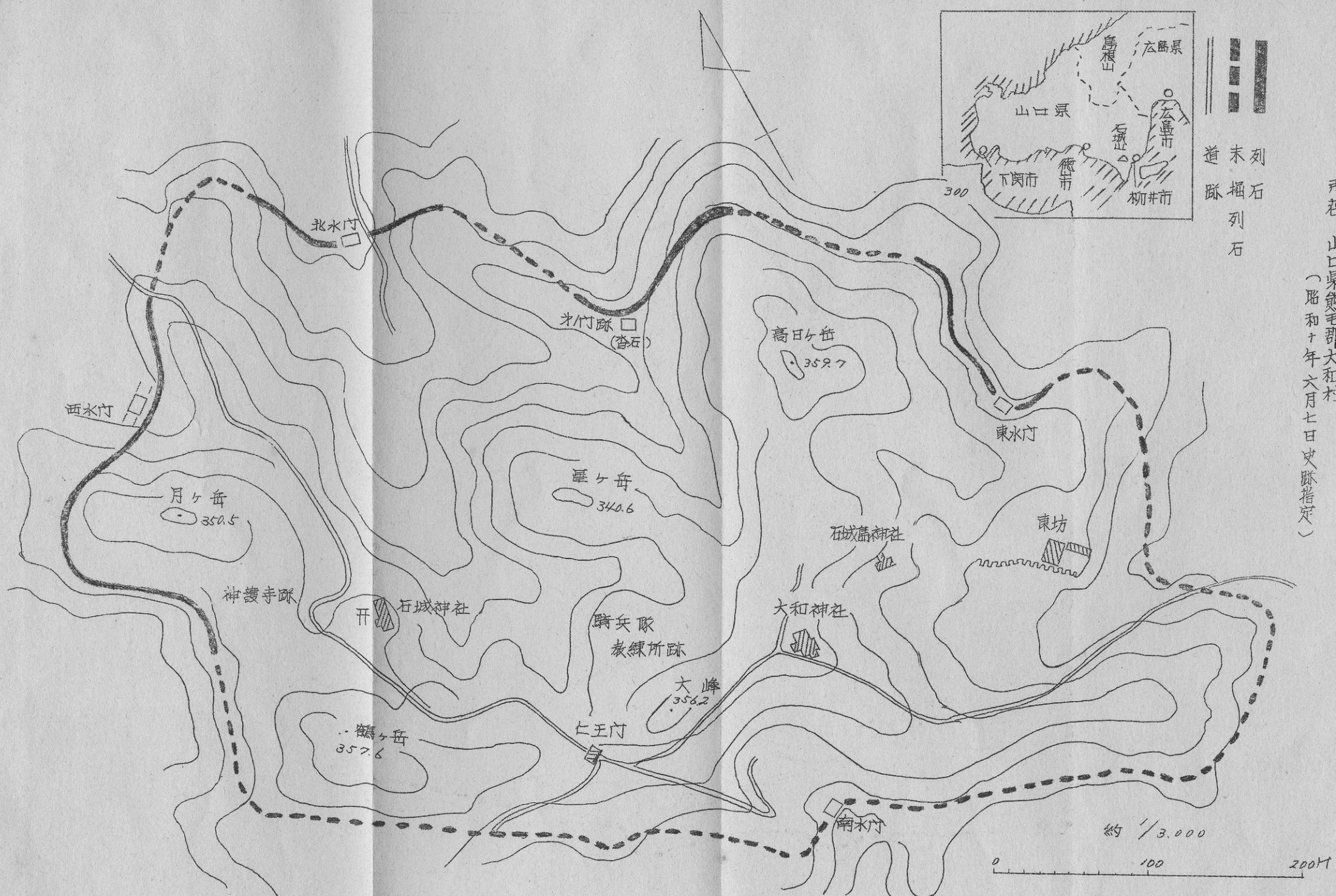
岡村俊介

田中茂支

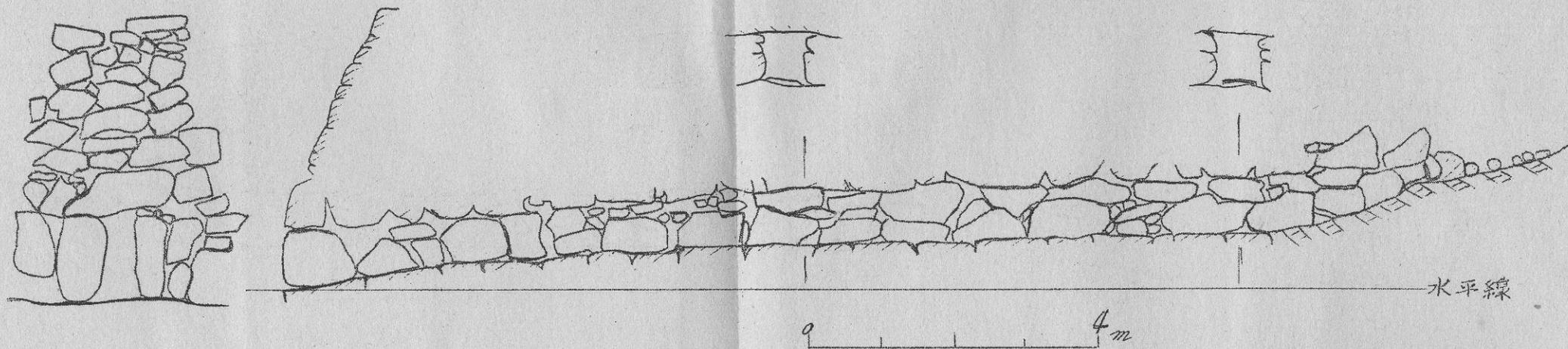
長沢朝夫

才一図 石城山神籠石略図

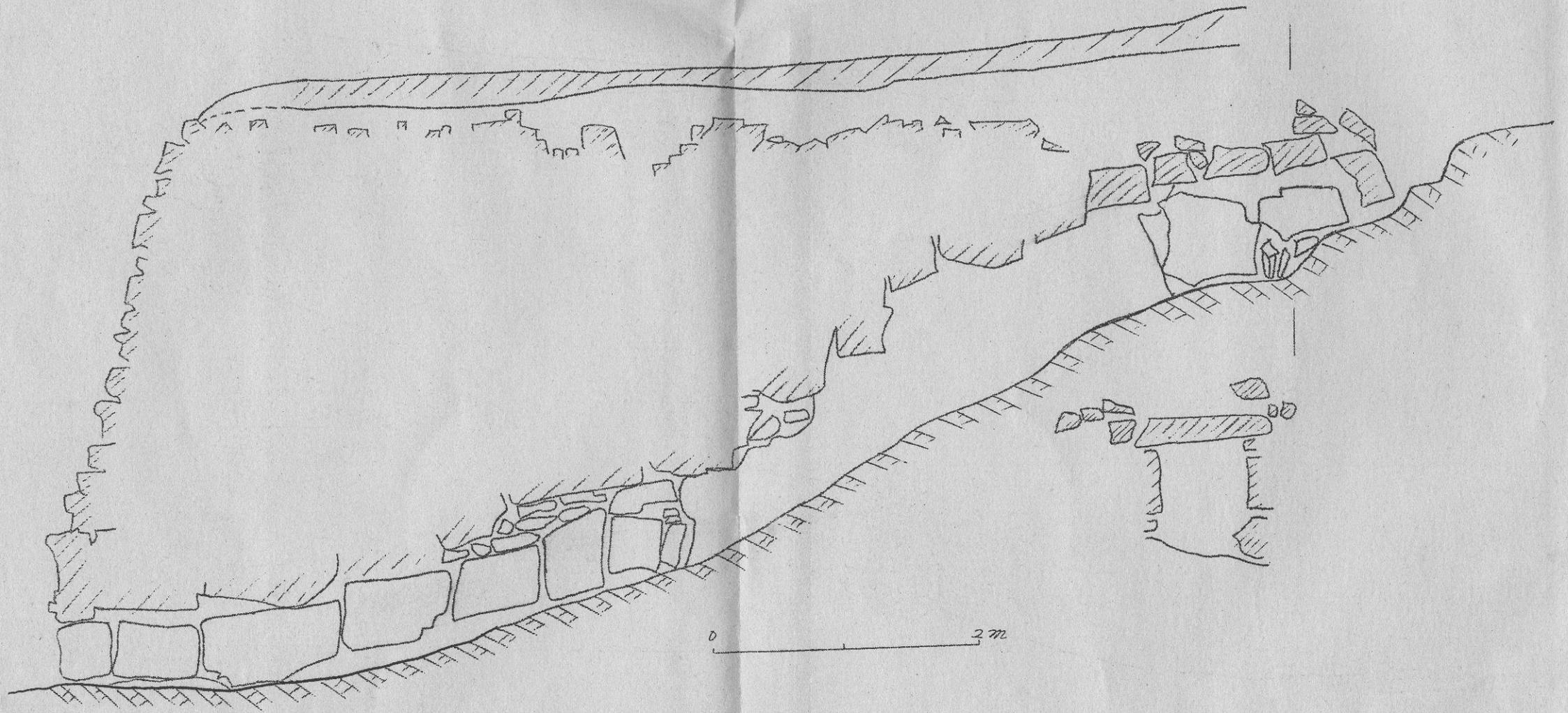
所在 山口県熊毛郡大和村
 (昭和十年六月七日史跡指定)



~41.42~



才之四 北水門排水溝略図 (約 $\frac{1}{80}$)



※3 図 東水門排水溝略図 (約 1/40)

中4図 才一門跡 (沓石地区) 平面略図

